

# 「基本的生活態度の形成をめざす指導」の研究 (八)

—教師とM児の態度変容を追つて—



仏性とよ子・服部  
稻岡百合・谷川敬  
馨

(三) 教師 言葉だけの理解・眞実の愛情に欠けていたこと  
M児 教師を信頼していなかつたこと

事例 (六月十四日)

| M                     | 児                                 | 教<br>師                | 教師の気持 |
|-----------------------|-----------------------------------|-----------------------|-------|
|                       | 会集室へ入らず、<br>すねて庭の鳩の小屋<br>の傍に坐りこむ。 | Mちゃんいこうか。<br>(手をさしだす) |       |
| (ふりきつて後へさ<br>がりだす)    | 今日はどんなお話で<br>しょうね。                |                       |       |
| (だまっている)              | 先生、手を洗いにい<br>くし来る?                |                       |       |
| るのではなく、何か<br>(首を横にぶる) | ・教師をきらつてい<br>る                    |                       |       |

(だまつて手を握つ  
てついてくる)  
教師の顔をみてだま  
つて、廊下のベンチ  
に腰かける。

(教師ベンチへ腰か  
ける)  
Mちゃん今日お弁当  
もつてきたでしょ。

・ゆっくりとM児が  
どうして会集室に入  
れないかわけをきい  
てやる。ゆとりがな  
く、ただどうしてこ  
んなにいじわるくな  
れるんだろうといら  
だつてくる。  
・ほつておこうか?

入りたくない気持が  
あるらしい。

・手を洗うことはい  
やらしい。

んにMちゃんの知らない間に入れて下さつたかもしれない。

ほってみたい。

・ここで教師がまけては、M児より教師として駄目になりそ

うで、自分自身がだんだんとみじめになつてくる。

(だまつてついてくる)

(だまつてついてく

る)

ああ入っていたわ、よかつたね。

(だまつたまま部屋をでて昇降口の方へで行く)

(だまつたまま部屋をでて昇降口の方へで行く)

・見て見振りをすると入つてくるのに、呼びに行くしりごみする。どうい

つた教師の態度がこ

の場合適切なのだろうか。

(教師の顔をじっとみている)

(ここにいた方がいいの?)

・今M児を暖かく抱きよせてやつたらよいのだろうか。

・手をつないだけのふれ合いでは、気持が通じないのだろうか。

(昇降口の中まで入

つてくる)

教師の顔を見ながらまた外へ出る。

教師が部屋へ入れようと迎えに行く。

・教師自身が現在のM児に対しても直な感情をもつていなかのだろうか。

(考察)

・M児はまた不機嫌な顔をしている。今日は、廊下のベンチにいないで表庭へ出て鳩をみている。何か気に入らぬことでも朝からあつたのだろうか、教師のもつふんいきが、今日はM児にいやな感じを与えたのだろうか。

・たしかに教師は、また不機嫌などといった感情を一時的にも持つことは事実である。その気持をよみとり、M児があのようなく、あせりが感じられたのである。

・このようなあせりのある間は、いくら手をさしのべてもそれは形の上だけのこと、M児と教師とのふれ合いは、どこを見ても見出せる状態といえない。

・教師は何とかして早くこのM児を何かのあそびに入れたい、こんないらだたしい気持から逃げ出したいとさえ思えたのである。

・話題をおべんとうにもつていったことも、M児の心のやみを理解しようとするよりおべんとうのお話をすることにより、何が今の気分から転換できるのではないかという教師の甘い考え

方にすぎないのではなかつたろうか。

自分は教師ではあるが、早くM児から解放されたいと思つてゐる。このような気持の教師に手をひかれ、おべんとうのおはなしをきかされたところでM児の気持がほぐれ、素直になれるはずがないのである。このことにより、心のそこから相手を理解することの困難さが痛切に感じられ一口にいう理解という言葉の真の在り方、眞の尊さを考えさせられたのである。

### 教師の態度

教師の自信過剰な動きが、M児に不機嫌をおこさせたようである。M児が折角教師といつしょならば動けそうになつてきているのに、うかつな気持からM児をさそつた、しかもその誘いかけをしりぞける児を、いやな子だ、いじわるい子だといった氣持で接したことが、M児をますます不機嫌にした。そのため食事をいつしょにすることをきらい、自分を理解してくれると思える園長とともに、食事したのである。教師は、園長と食事をとったM児をにくらしく思うよりも、園長のもつ人格とM児とのふれ合いが、教師とM児とのふれ合いと何かちがつたものを、M児が感じてゐるのであろうと考えた。食事をして部屋に帰ってきたM児をにくらしい、いじわるいといった感情をすべて去る努力をしたことがM児を明るい素直な感情にさせたようである。

### 事例（七月五日）

| M<br>児  | 教<br>師                                      | 教師の気持  |
|---|---|--|
| (M児、A児と手をつないで、ろうかを歩いている)<br><br>(M児、A児教師の後をついてくる)<br><br>(画用紙を二枚持ち)<br><br>(赤色)ながら<br>はい Aちゃん、<br>Mちゃんもね。 | きょうは一人に美しきようあげようね。<br><br>(小声で話しかけながら部屋へ入る) | ・教師の言葉に上手にのつて調子よくいきそうに思えた。<br>・別々に紙をわたせば、どうしても自分の紙にかかるればならないくなるし、また書けたときでできたといつた自信が湧くかもしれないと思い一枚ずつ与えようとした。<br>・A児が一枚でええわとかえた時、ガクッとした。期待を大きくかけていたことを感じた。<br>・どうかして一人づつかせたい。 |

もち描こうとかまえ

る。(しばらくして)

A児「一枚でええ

わ」

A児「二人でいっし

ょにかくもんなあ」

(そばにM児画用紙

をもつて立つてい

る)

どうして?

そう、でもねたくさ

んかいてお母さんに

みていただくとき、

二人でかいたの半分

ずつにやぶるの?

困ったわね。

・ひとりでかこうと  
いう氣持をおこして  
ほしいと思つた。

・ひとりでかこうと  
いう氣持をおこして  
ほしいと思つた。

・かせたいと思う気持が強かつた。

・この時教師はM児の気持を大切にするよりも、一人で一枚に描

かかそうとした教師の気持がかえつてM児を動けなくしたので

あろうか。

・Aがあの時「こうかきや」といった、あの素直さがM児が筆を動かす結果になったのではなかろうか。

・友だちが描けなくて困っているのをみて助けてあげよう、力をかしてあげようとしたAの態度にM児はついていけたのだと思えると同時に、この時教師にはこの気持がうすく、ただ描かそうとした。教師にM児に対する理解する態度が欠けていたのである。

A児「ほなええわ」  
A児「Mちゃんおい  
で(M児をつれて描  
く場へつれていく。  
その場へ二枚画用紙  
を並べる)

こうかきや、こう  
やで(とA児がいい  
ながら自分のを描き  
だす。M児それをみ  
て描きだす)

・A児がこうかき  
や、といつているあ  
の素直さ、困つてい  
る友だちにやさしく  
いっているあの態度  
がM児をうごかして  
いるのだろうか。

・今までえのぐで描くなどと思いつもよらなかつたM児に、美しい  
画用紙を渡そうとした教師の心の中には、今日のM児ならばこ  
れくらいの抵抗力は乗り越えていけるだろうといったM児に対  
する教師の自信のようものが動いたのである。

・A児といつしょではあつたがM児が、友だちの暖かい思いやり  
のうちに教師からあたえられた抵抗を乗り越え、自分で動こう  
と努力する態度がはつきりみられたのである。

(考察)

・教師はどうかして、M児が一枚の画用紙に自分で取りくむよう  
にさせたかったし、描くことにより、自分もやれるのだとい  
う、自信をもたせたかったのである。

たくさん描いてお母さんみていたくことが、半分半分にしなければならないし、とかいった、ただ現象面をとらえて話しかけているこのようない教師の態度を口先だけの理解

いうならば、A児のとった態度は、困っている友だち、一人では描けないM児を全身で理解しているといえないだろう。

か。口先の理解、頭の中でだけの人間理解をすることではない、教師自身の全身で子どもを理解できるようになる自分になることが先決ではなかろうか。この必要性をこのケースによりはっきりと知らされたのである。

(四) 真実の愛情で包んでやろうと努力したことにより、教師を信頼するようになったことについて

事例(七月十三日)

| M                       | 児                                    | 教 师                   | 教師の気持   |
|-------------------------|--------------------------------------|-----------------------|---|
| (M児、年少組のA児と、もうかのベンチにいる) | Aちゃんもいっしょに黄組であそびましようか。いらっしゃい(手まねきする) | ・年少児と一緒にいる方がいいみたいと思う。 | (M児)<br>はいり   |
| (M児、年少組のA児と、もうかのベンチにいる) | ・いつしょにさそつ                            |                       | (再び)<br>アハハ……<br>(そこへB児来る)<br>まぜて   |
|                         |                                      | でんわもおいておこうね。          | アハハ……<br>(と靴をぬぎ、ござの上にあがる)<br>アハハ……<br>そうそうここのお家、垣根をしておこうね。(といいながら棚をおき家をかこう) |

(二人、教師について保育室に入る)

ほーらMちゃんに、お家を一つあげよう

ね。(ござもひいておこうね。(と家の前にござをひく)

てみよう。そのことによって動くかもしれないと思つた。

・教師の手まねきにすぐ入ってきた時、何かうれしい気持だった。

アハハ……  
(と靴をぬぎ、ござの上にあがる)

そうそうここのお家、垣根をしておこうね。(といいながら棚をおき家をかこう)

・M児の笑い声をきいていると教師の方がうれしくなる。

・友だちをどのよう受け入れるかな、気がかりである。

(考察)

・自分の組の年長児よりも、近所に住んでいる年少児といふ方  
が、安定感がもてるのだろうか。その安定感をくずさないよう  
にあそびに誘導してやれば、スムースにあそべるのではないだ  
ろうか。

・年長児らしいあそびを、M児にのぞむ教師がむりをしているよ  
うに思えたから年少児といって区別せずさせたのである。

・後からA児が来た時も、ためらわずに受け入れていける。やは  
り気持よくにこにこし満足しあそんでいるからこそ、A児を受け  
入れられたのではないか。

・年少児とあそぶなんて、年長児は年長児らしくといった教師の  
構えがつよく打ち出されていたならば、M児の今日の態度はみ  
られなかつたのではないか。

・一場面をみて、年長児らしくないとか、二年も幼稚園にきてい  
るのに、などと構える教師の見方、感じ方の幅のせまい時、子  
どもは不安定になりやすく、それが望ましくない状態と教師の  
目にうつるのではなかろうか。

### M児の態度

M児が年少児といるからといって教師が気にしないところ  
に、M児は、教師が自分を受け入れていてくれると感じ、そ  
の安心感から教師のいったことにも素直に応じるようであ

### 教師の態度

此の頃、M児がA児のことを何でも素直にきいている  
ようすを、教師はしばしば見たり、感じたりしてA児をねた  
ましくさえ思つたのである。

この前のケースからも、園長にある何かが自分には欠けて  
いると感じたように、A児にある何かがM児に接する自分に  
は欠けているのではなかろうか、ともかくM児が自分に素直  
に動いてくれないということだが、M児と接しているうちに、  
はつきり感じられる。

結局自分は、M児がどうかして動いてくれるようにと思つ  
ばかりで、M児に対する暖かい思いやり、M児を暖かく包ん  
でやろうとする心情に欠けていたことを、はつきり知ること  
ができたのである。

る。後からA児が仲間入りした時も、すぐに受け入れてい  
る。自分が受け入れられることのできないときには、人を受  
け入れることはできないのである。今日のM児は満足し、気  
持よくあそべたのである。その結果が他人をも心よく受け  
入れることができたのである。教師に受け入れられ、友  
だちに受け入れられてばかりに見えていたM児にも、漸く他  
人を受け入れられる面の芽生えがみえたようである。